

愛知県農林水産業の試験研究基本計画2025 取組事項一覧(最終評価)

【農業部門】

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
ア 高収益、省力生産を可能にするスマート農業の実現				
(7)高度なセンシング等に基づく最適管理技術の開発				
・水稲、小麦、大豆におけるセンシング技術の開発（3技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲、小麦、大豆におけるセンシング技術を3技術開発した。 ・水稲は「なつきらり」の玄米タンパク含有率推定技術を開発した。（2019～2025） ・小麦は「きぬあかり」の茎立期の生育指標値推定技術（追肥量診断）、「きぬあかり」「ゆめあかり」の成熟期推定技術（収穫適期診断）を開発した。（2019～2025） ・大豆は「フクユタカA1号」の主茎長推定技術（倒伏リスク診断）を開発した。（2020～2025） 	終了	—
・携帯端末カメラ等を利用したトマト、ナスの生育診断技術の確立（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・トマト及びナスの生育診断技術を確立した(各品目1技術、合計2技術)。 ・トマトにおいて、茎径と開花位置に基づく診断基準を明確化し、診断技術を確立。(2021～2023) ・トマトにおいて、摘葉の影響を明確化。(2024) ・ナスにおいて、茎径に基づく診断基準を明確化し、診断技術を確立。(2021～2023) ・画像解析ツールによる生育診断と施設内環境データを統合し、今後の栽培管理を提案可能なアプリのプロトタイプを作成。(2024) ・現地試験によるプロトタイプの改良を実施し、生育コントロール技術を確立。(2025) 	終了	—
・センシングによるキャベツ等露地野菜の生育診断技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・畝垂直に計測する開張が、キャベツ重量と相関が高いことを突き止め、安価な可視光カメラを用いて、キャベツの開張を推定できるプログラムを開発した。(2021～2023) ・可視光カメラのセンシングに基づいた可変施肥試験によりキャベツの斉一性向上効果を評価した。(2024～2025) 	終了	—
・ナシ等の生育、果実品質の予測・判別技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・「幸水」、「瑞月」の開花・収穫時期について、愛知県版の開花・収穫予測モデルを作成した。(2021～2023) 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・センシングによる牛の繁殖関連行動等の検知技術の開発（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・センシングによる牛の繁殖効率改善技術を2技術開発した。 ・検定成績に実装された生乳検査項目である乳中脂肪酸の割合を解析し北海道の基準値が本県の、飼養管理でもプロファイリングに活用できることが分かった。（2021～2023） ・牛の鳴き声とカメラ画像から個体識別と発情発見が可能になり、通知するシステムを開発できた。（2021～2025） 	終了	—
・ドップラーセンサーとAIを活用した鶏群の行動解析技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ドップラーセンサーを用いた安価な装置と簡単な処理で、名古屋コーチンの密集につながる活動量の変化を検出できることを明らかにした。（2021～2022） 	終了	—
・センシング技術を活用した画像処理による鶏卵評価技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・一度の画像撮影で、卵重及び卵形を測定し、白斑点を評価できる外部卵質の総合評価システムを開発した。（2022～2025） ・超音波厚さ測定機を用いて、非破壊での卵殻厚測定技術を開発した。（2024～2025） 	終了	—
・簡易かつ安価な土壌環境測定手法の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・土壌水分、地温、ECを1台で測定し、ネットワークを経由して収集したデータをスマートフォン等で確認できる装置を開発し、作成マニュアルを公開した。（2021～2023） 	終了	—
・作成した変換式を用いての1～2生産者での現地実証	A	<ul style="list-style-type: none"> ・試験場とサイポートのカメラの変換式を6技術について作成した。6技術とは、ア（ア）の3技術に加えて、小麦の莖立期生育推定、水稻「なつきらり」の生育量と収穫時期の推定である。 ・西三河地域で水稻と大豆の現地実証、海部、豊田、西三河で小麦の現地実証を実施した。（2023～2025） 	終了	—
(イ) 作物の能力を最大限に発揮させる環境制御技術の開発				
・トマトのLED補光を活用した高度環境制御技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・補光による生産性向上技術の開発に向けた課題を明確にすることができた（1技術）。 ・補光によって可販果収量が増加。（2021～2022） ・増収技術として確立するとともに、採算確保のための課題を整理、明確化。（2023） ・結果をとりまとめ、愛知県農総試研究報告の研究ノートとして公表。（2025） 	終了	—
・ミニトマトにおける高度環境制御下での栽培管理技術の開発（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・増枝・側枝葉利用による高単価期増収技術を開発した。（2021～2023） ・密植による高単価期増収技術を開発した。（2023～2025） 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・ナスの高度環境制御下における着果管理技術及び養液栽培技術の開発（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・着果管理技術及び養液栽培技術を開発した（2技術）。 ・着果数に応じた果実重による収穫及び周期の適性着果数を明らかにして着果管理技術を確立し、指針案を作成。（2021～2023） ・微量要素欠乏とつやなし果を解消し、可販果率が向上する養液栽培技術を確立。（2021～2024） 	終了	—
・イチゴの環境制御、栽培管理技術の開発（3技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・環境制御、栽培管理技術を開発した（環境制御による収穫期間拡大、給液、芽数及び果房管理各1技術、合計3技術）。 ・クラウン冷却と短日夜冷の組み合わせによる収穫期間拡大（前進化）技術を確立。（2021～2023） ・クラウン冷却と短日夜冷の組み合わせについて、主要品種での比較を実施。（2024） ・日射比例給液による厳寒期の生育改善技術を確立。（2021） ・芽数及び果数管理を最適化試、管理技術を確立。（2021～2022） 	終了	—
・バラにおけるLED補光を活用した高度環境制御技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・高輝度LEDを使用して収量を3割程度増加できる補光技術を確立した。LEDは明け方を中心とした6時間程度照射し、炭酸ガス施用との併用が適する。（2021～2025） 	終了	—
・LED補光等高度環境制御による洋らんの高品質生産技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・遮光下のコショウランに高輝度LEDを照射すると花蕾数が増加した（1技術確立）。遮光率が高いほど増加の効果は高くなった。また、炭酸ガス施用と飽差管理との組み合わせによりLED単独よりも花蕾数増加効果が高まった。（2021～2025） 	終了	—
・統合環境制御によるキクの冬季生産性向上技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・CO2施用条件下で、栄養成長期間の昼間の換気温度を高くすることで、品種によって生産性向上効果がみられた（1技術確立）。（2021～2025） 	終了	—
・ハウスミカンにおける炭酸ガス施用を軸とした高度環境制御技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・炭酸ガス日中施用に養液土耕栽培を組み合わせることで1樹あたり14%収量の増加を確認した。（2020～2023） ・炭酸ガス施用下でのミスト施用による湿度制御技術を開発した。（2024～2025） 	終了	—
(ウ) スマート農業技術の体系化と社会実装				
・小麦におけるセンシングを活用した精密栽培技術の実証	A	<ul style="list-style-type: none"> ・現地実証試験の結果、茎立期のセンシングによる可変施肥追肥により収量、タンパク質のバラつき、および施肥コストの低減効果を実証できた。（2021～2023） 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・水田作におけるスマート農業経営モデルの策定（3モデル）	A	①水田作大規模経営体、②中山間地の稲単作経営体、及び③有機JAS等環境配慮に取り組む経営体におけるスマート農業技術（直進アシスト田植機及び薬剤散布用ドローン）を導入した農業経営モデルを3モデル策定した。（2021～2023）	終了	—
・施設果菜における生育情報と環境情報による収量予測技術の実用化	C	実用化に必要な精度を得ることができなかったものの、対象とした3品目すべてで栽培試験に基づく収量予測式を作成することができた。 ・トマト、イチゴ、ナスにおける収量予測式の構築、検証、精度向上。（2021～2024）	終了	—
・統合環境制御下におけるトマト高収益生産システムの実用化	A	・窒素日施用技術、裂果対策技術を組み合わせ、統合環境制御下における高収益生産システム指針の作成を行った。（2021～2025）	終了	—
・AIを活用したトマト・キュウリの病害虫診断技術の開発	A	・キュウリの病害虫診断について、識別精度が平均80%以上の病害虫画像識別人工知能を開発した。（2021） ・トマトの病害虫診断については、共同研究機関として黄化病とその類似障害の画像データを収集した。（2020～2021） ・シソの病害虫診断については、11種類の病害虫の識別精度が80%以上の画像識別人工知能を開発した。（2023～2025）	終了	—
・ハウスミカンにおける炭酸ガス施用下のかん水及び着果管理技術の確立（1技術）	A	・炭酸ガス施用により、生理落果の減少が確認された。（2021） ・炭酸ガス施用下では、多着果+かん水量増の場合、増収することが確認された。（2022～2023） ・日射量に応じた、チューブかん水による加湿処理制御により、加湿処理区のハウス内湿度が対照区より上昇すること、増収することが確認された。（2024～2025）	終了	—
・スマート農業技術を導入した施設園芸の人的資源活用モデルの策定（1モデル）	A	・スマート農業（統合型環境制御）を導入した施設キュウリ経営体について、労働時間調査・職務満足度調査を実施した。（2021～2023） ・労働時間調査・職務満足度調査の実施内容を事例集（人的資源活用モデル）として取りまとめた。（2023） ・Googleサービスを活用し、作業員ごとの作業効率から適切な人員配置も含めた効率的な労務管理に役立つ、労務データを見える化するマニュアルを作成した。（2023）	終了	—
・簡易なモニタリング技術を利用した茶の高品質生産技術の実証（1技術）	A	・IoTを活用した簡易なモニタリング装置を活用し、茶の高品質生産条件（光量、土壌水分）を数値化した。 ・また、生産者が自身のほ場で数値を確認できるツールとして、モニタリング装置を改良した。（2024～2025）	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・キャベツ等における収穫支援技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・キャベツの収穫ペースに合わせた制御を実装した収穫物運搬車両を開発した。（2022～2024） ・身体負担軽減・省力化等の評価を行い、キャベツの収穫・運搬作業に適用した結果、作業効率の向上が見られた。（2024） 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
イ 気候変動等の環境変化に対応した持続可能な農業の推進				
(ア) 地球温暖化等の生産環境に対応する技術の開発				
・ 水稲、小麦、大豆の生育予測技術の改良（3技術）	A	・ 予測誤差が大きかった技術について改良を行い、精度検証した。（2021～2025） ・ 改良した技術は、小麦「きぬあかり」の出穂期予測、水稲「あいちのかおりSBL」の出穂期予測、「あいちのこころ」の出穂期予測の3技術である。	終了	—
・ 土壌炭素貯留を高める露地野菜の安定生産技術の開発（1技術）	A	・ 土壌炭素貯留を高める技術を開発した。 ・ 堆肥と緑肥の併用による土壌中炭素含量の動態を明らかにし、併用効果を評価した。（2021～2023）	終了	—
・ 多雨に対応した露地野菜畑の排水性改善技術の開発（1技術）	A	・ 排水性改善技術を開発した。 ・ パワーハローの使用による、ロータリーと比べた土壌表面と地下15～20cmの排水性改善効果を明らかにした（2023）。	終了	—
・ 温暖化に対応したバラ・アジサイの高品質生産技術の開発（2技術）	B	・ バラでは高温期、超微粒ミストと併用して収穫調整による株養成を行った場合、収穫調整以降に発生する60cm以上の切り花本数が増加した（1技術確立）。（2021～2024） ・ アジサイの心落ち症状は、発蕾期からガク片伸長期の環境条件の適正化や水管理の改善により発生を抑制する方向性が確認できた（2021～2025）。	継続	・ 高温対策技術の開発・普及に向けて取組内容の精査や技術の精度を向上させる。
・ 夏季におけるキクの高温障害抑制技術の開発（1技術）	A	・ EON冷房で到花日数が短くなり、頭上散水等により、開花遅延の防止や切り花重の増加などの品質向上効果がみられた（1技術確立）。（2021～2025）	終了	—
・ ブドウの高温障害対策技術の開発（2技術）	A	・ ブドウ「巨峰」において高温障害および着色不良の対策技術を2技術開発した。（2020～2024） ・ 高温障害対策技術では笠かけおよび葉面積の確保が有効な対策であると明らかにした。（2022～2024） ・ 着色不良対策技術では、ABA含有液剤を散布することで着色向上し、散布粒径の小さい機材を使用することで果房の汚れが少なくなることを明らかにした。（2020～2024）	終了	—
・ 覆い下環境制御によるてん茶の高品質生産技術の開発（1技術）	C	・ 覆い下環境制御によるてん茶の高品質生産技術として点滴かん水やミスト散水技術の検討を行った。（2021～2025） ・ 夏季渇水期の点滴灌水により夏芽の生育が促進されたが、翌年一番茶の収量・品質は慣行と同等であった。（2023～2024） ・ 新芽生育期のミスト散水は、一番茶の収量・品質を高める効果はなかった。（2022～2024）	見直し	・ 開放系である覆い下茶園では、水を使った環境制御で一番茶の収量・品質を高めることは難しいと考えられる。 ・ 基本計画2030では、センシング等を利用した三重被覆の遮光技術や夏季における樹勢維持・向上技術の開発に視点を移しててん茶の高品質化技術の検討を進める。

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・地球温暖化抑制のための有機質資材施用技術の開発（1技術）	A	・イチジクせん定枝の土壌中での炭素貯留効果、肥料特性及び作物への影響を解明した。（2021～2024）	終了	—
気候変動に対応した効率的な土壌管理モデルの開発（2技術）	A	・露地野菜畑での土壌温度と気温データから畑条件の土壌環境動態モデル（土壌温度）を確立した。（2021～2022） ・有機質肥料（畑条件：12種、水田条件：15種）の窒素発現量予測モデルを確立し、気温を組み合わせた予測ツールを構築した。（2022～2025）	終了	—
・露地・施設野菜における高機能バイオ炭利用技術の開発（2品目）	A	・モミガラ原料の高機能バイオ炭を利用した際に、キャベツ、トマト栽培に悪影響がないことを検証した。（2023～2024） ・低温でも有機物分解能力に優れる微生物を選定した。（2024） ・鶏糞原料の高機能バイオ炭施容量の上限を決定した。（2025）	終了	—
(イ) 新たな病害虫や多様なリスクに対応する技術の開発				
・水田作における除草剤抵抗性雑草防除技術の開発（1技術）	A	・水稲V溝直播栽培におけるグリホサート抵抗性ネズミムギについて、整地前にザクサ、播種前にブリグロックスを処理する防除技術を現地実証し確立した。（2021～2023） ・これまでの試験結果をまとめ、防除マニュアルを作成した。（2023）	終了	—
・水管理による玄米中の無機ヒ素低減技術の開発（1技術）	A	・出穂前後計6週間・1回落水について、ヒ素低減効果、収量と品質への影響を明らかにし、技術化することができた。（2018～2022）	終了	—
・水田畦畔の漏水予防及び対処技術の開発（1技術）	A	・東海農政局と共同して、ほ場や排水路でのザリガニの捕獲調査や畦畔の巣穴調査を行い、その成果を総合的に取りまとめ、効果的・効率的なザリガニの低密度管理に向けた対処技術を開発した。（2021～2025）	終了	—
・水田排水口周りからの畦畔崩壊防止技術の開発（1技術）	D	・対策型排水柵の形状案を複数考案した。 ・形状を考案する過程で、考案品よりも施工実績や経済性に優れた最適な既製品を採用することとした。（2021～2022）	中止	・考案品の検証のために実施する予定であった現地調査と漏水再現場内試験は行う必要がなくなった。
・大豆におけるシロイチモジヨトウの発生予察手法の開発（1技術）	A	・大豆におけるシロイチモジヨトウのフェロモントラップを用いた発生予察手法を開発した。（2019～2023）	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・モモ、ナシの急性枯死症状の発病様態の解明及び原因細菌の迅速診断技術の開発（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・モモ幼木は地温27℃以上で地下部が湛水していると急性枯死症状を発病することを明らかにした。（2022） ・ナシ幼木は地温20℃以上で急性枯死症状を発病することを明らかにした。（2022） ・モモの発病には品種間で差異があること、特定の穂木及び台木を利用することにより発病が抑制できることが分かった。（2021、2023～2024） ・LAMP法による土壌や樹脂からの病原菌検出技術を開発した。（2021～2024） 	終了	—
・環境DNA解析を活用した外来種の迅速検出技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・SGF法を活用した外来種の環境DNA調査技術をまとめるとともに、オンサイトで対象種の在・不在を検知する技術を確立した。（2021～2023） 	終了	—
・病害虫診断用DNA分子マーカー及び複数病害虫の一括診断法の開発（4マーカー、1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・マイクロ流体チップを利用した多検体同時遺伝子診断法の有効性を確認した（1技術）。（2021-2022） ・県内で発生しているウイルス病の診断用マーカー（3マーカー）を開発した。（2021-2023） ・殺菌剤に耐性を持つ灰色かび病菌を検出できるマーカー（1マーカー）を開発した。（2024） 	終了	—
・SGF法と環境DNAによる生物検出技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・病原微生物や外来種等を対象とした検出試験によりSGF法の有用性を確認することで、SGFキットの商品化を進めた。（2024） 	終了	—
(ウ) 環境に配慮した持続的農業技術の開発				
・水田における地力を考慮した適正施肥技術の開発（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・水田における硫黄の供給量を把握し、施用の必要がないことを解明した。（2021） ・湿潤土壌で可給態窒素を簡易に測定する技術を開発した。（2021～2025） 	終了	—
・リン酸蓄積ほ場における環境に負荷をかけないナスのかん水同時施肥技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・かん水同時施肥技術を開発した（1技術）。 ・窒素及び加里の適正施用量の明確化。（2021～2022） ・一定以上の可給態リン酸を含む土壌で、リン酸無施用で栽培可能であることを実証し、かん水同時施肥技術を確立。（2021～2022） 	終了	—
・キャベツ菌核病の発生子察法の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・子のう盤形成時の地温や降水量、子のう胞子の飛散ピークを明らかにした。（2021～2023） ・子のう盤形成や子のう胞子飛散の消長から、キャベツ菌核病の発生子察手法を開発した。（2024～2025） 	終了	—
・カーネーションにおける微小害虫に対する天敵の利用技術開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・天敵（スワルスキーカブリダニ・ミヤコカブリダニ）の放飼により、微小害虫の密度抑制効果が認められた（2021）。 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・キクにおける微小害虫に対するIPM技術の開発 (1技術)	A	<ul style="list-style-type: none"> ・14日間以上冷蔵保存したキク挿し穂を農薬登録の半分の濃度でCO2処理することにより、障害を発生させずにハダニへの高い防除効果が得られることを明らかにした。(2021～2025) ・赤色LED照射と光反射シートを併用することにより、ミナミキイロアザミウマの侵入抑制効果が高まることを明らかにした。(2021～2025) ・展着剤を加用して挿し穂に48℃30秒または50℃10秒の浸漬処理を行うことにより、キク白さび病の高い防除効果が得られた。(2023～2024) 	終了	—
・環境負荷低減のためのイチジクの施肥基準の策定 (1技術)	A	<ul style="list-style-type: none"> ・JAあいち経済連とともに長期施用試験(6年間)によってL型元肥肥料を新規開発した。(2018-2023)長期施用の結果、樹体と果実生産ともに慣行の施肥体系と差異はなく、これら減肥による省コスト効果を公開した。(2024) 	終了	—
・地域毎の未利用資源を活用した牛用飼料の給与体系の確立 (3モデル)	B	<ul style="list-style-type: none"> ・竹飼料と未利用資源の組み合わせによる給与モデルは2事例確立できたが、3事例目は供試材料が入手できず断念した。(2021～2023) 	見直し	<ul style="list-style-type: none"> ・未利用資源の活用は飼料費の低減のためには重要な課題である。 ・今後も製造業が盛んな本県の立地を生かし、様々な新規飼料の活用技術を開発する。
・各地域特有の食品製造副産物の飼料への調整方法・保管方法・給与技術を確立する (3品目)	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒトの健康への推奨値に近い不飽和脂肪酸組成を有する豚肉生産のためのエゴマ搾り粕の肥育豚に対する給与方法を確立した。(2021、2023) ・肥育豚に対して、食品残さであるプロテインと菓子類の給与技術を確立した。(2022) 	終了	—
・未利用資源等を活用した家きんの飼養管理技術の開発 (3技術)	A	<ul style="list-style-type: none"> ・肉用名古屋コーチンに対する出汁しぼり粕、パウムクーヘン屑ならびに両方の混合物の最適給与量をそれぞれ明らかにし、生産コスト低減技術を開発した。(2021～2023) ・ウズラに対して大豆粕の代替原料としてのゴマ粕の代替割合について検討し、生産性を損なわない代替割合の上限値は10%が適当と明らかにした。(2021～2023) 	終了	—
・畜産汚水中の窒素低減技術を組み込んだ浄化システムの開発 (1技術)	A	<ul style="list-style-type: none"> ・還元触媒製剤利用時における消化液上清中の窒素系環境負荷物資の低減に、アンモニアストリッピングを組み合わせた処理が有効であった。(2021～2024) 	終了	—
・バイオマスを利用した良質堆肥生産技術の開発 (1技術)	A	<ul style="list-style-type: none"> ・立体型蒸散装置による消化液の減容技術の開発及び搾りかす単独での堆肥化で短時間で良質な堆肥生産が可能であることを明らかにした。(2021～2023) 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・畜産の悪臭低減、臭気拡散防止技術の開発（1技術）	A	・ネット状資材を乾燥ハウスに利用し、風速を抑制することで、臭気、粉じん濃度を抑制する、悪臭低減、臭気拡散防止に資する技術を開発できた。（2021～2023）	終了	—
・有機栽培茶における耕種的害虫防除技術の開発（1技術）	A	・有機栽培茶における耕種的害虫防除技術を1技術開発した。 ・茶園へのミスト散水によりカンザワハダニの発生を抑制できることを明らかにした。（2022～2025）	終了	—
・土壌の養分供給力及び土壌肥沃度の予測技術の開発（2技術）	A	・土壌炭素含量から全窒素、可給態窒素を予測するオンラインストレージアプリを開発した。（2021～2022） ・土壌特性に基づく養分管理技術として、カリウムの土壌からの供給量を評価し、カリウムの供給源である土壌中の非交換態カリウム量を簡易に推定可能な方法を開発した。（2021～2025）	終了	—
・ため池に生息する希少生物の環境DNAによるモニタリング法の開発（1技術）	A	・希少生物（ウシモツゴ）のDNA検出率を高める採水方法等の比較検証を行い、調査手法を確立した。（2021～2023） ・網羅的解析の検出精度分析を行い、環境DNA調査法が従来手法より優位な可能性があることを確認した。（2022～2024）	終了	—
・企業等から排出される炭酸ガスを活用したイチゴ群落内施用システムの開発（1技術）	A	・新たな群落内炭酸ガス施用システムを開発した（1技術）。 ・場内及び現地試験を実施し、濃度変動が少なく効率的に施用可能な技術を確立。（2024～2025） ・経済性について検討し、実用化に向けた課題を明確化。（2024～2025） （あいち農業イノベーションプロジェクト）	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
ウ 愛知の強みを生かした競争力の高い農業の創造				
(ア) 低コストで労働生産性を高める技術の開発				
・大豆の生育改善対策技術の開発（1技術）	A	・カットドレーン施工による排水性向上技術を開発した。（2021～2023） ・安城市と西尾市で現地実証試験を実施した（2021～2023）。	終了	—
・単為結果性及びとげなし性ナス品種を活用した促成作型生産技術の開発（1技術）	A	促成作型における「試交17-22」の生産技術を開発した（1技術）。 ・整枝方法、かん水頻度、適用方法を最適化し、可販果量が多い栽培方法を確立。（2021～2023） ・促成栽培向け栽培指針を作成。（2024） ・夏秋作型においては、品質の確保が難しいと判断。（2022～2023 ※目標修正）	終了	—
・ブロッコリーの生育斉一性の向上による省力化技術の開発（1技術）	A	・斉一性などの観点から、加工業務用として適正の高いブロッコリー品種を6品種選定した。（2021～2022） ・斉一性を向上させる栽培様式を検討し、株間27cm、追肥3回において、追肥2回目または3回目を慣行より増肥することで斉一性が向上した。（2023～2024）	終了	—
・カーネーションのBA処理、LED等を活用した増収技術の開発（1技術）	A	・高輝度LEDの朝方照射で年内の収穫開始が早まりEOD管理することで2月以降の収穫本数が増加することが明らかになり、BA処理との組合せの経済性も検証した結果、「高輝度LED朝方照射+EOD管理」による増収技術を開発できた（1技術）。（2021～2025）	終了	—
・クルクマの球根安定生産技術の開発（1技術）	A	・施肥量や地温条件、給水条件それぞれにおいて球根の安定生産技術の実証を行い、中でも給水期間を11月末までとした管理技術は、最も球根数、球根重が増加したうえ、低コストであった（1技術確立）。（2021～2024）	終了	—
・ブドウの省力化のための植物成長調整剤利用技術の開発（1技術）	A	・「シャインマスカット」において早期GA処理による房作りの作業軽減技術を開発した。（2020～2023） ・早期GA処理の植調試験を実施し、2026年に「シャインマスカット」へ適用拡大される見込み。（2022～2024）	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・カンキツ「夕焼け姫」の着花・着果管理による連年安定生産技術の確立（1技術）	A	・摘らい、枝別全摘果、後期重点摘果技術を組み合わせた着果管理による高品質連年安定生産技術を開発した。 ・また、完全着色後の着果部位別の果実品質および退色程度を調査した結果、果実品質では部位別に差は無く、果皮色では南側上段が退色した。また、上段は下段に比べて退色する傾向が見られた。（2021～2025）	終了	—
・牛の省力的かつ効率的な繁殖サイクル短縮技術の開発（1技術）	A	・再生医療を活用した乳牛の早期繁殖機能回復方法を1技術開発した。（2024～2025）	終了	—
・カラスの追払い技術の開発（1技術）	A	・カラス用電気柵を開発し、被害果軽減効果を確認、ドローンを用いた追払いも実証により効果を確証した。（2021）	終了	—
・イノシシ等の追払い技術及び殺処分効率化技術の開発（2技術）	A	・イノシシの習性を利用した、成獣を捕獲しやすい捕獲檻を開発した。（2021～2025） ・アライグマのみを選択的に捕獲する新たな捕獲器具を開発した。（2023）	終了	—
・3条タイプ播種機の試作と改良	A	・3条タイプの一工程高速畝立播種機の試作と改良を実施した。（2023～2025） ・安城市と刈谷市の延べ4農家、約7haで現地実証試験を実施した。（2024～2025）	終了	—
(イ) 消費者等の多様なニーズに対応する生産技術の開発				
・水稲「愛知135号」の安定栽培技術の確立（1技術）	A	・収量570kg/10a、玄米タンパク質7.7%以下を目標とし、栽培マニュアルを完成させた。（2021～2023）	終了	—
・実需の要望に対応した小麦安定生産技術の開発（1技術）	B	・硬質小麦「ゆめあかり」の莖立期の生育状況に応じた施肥法について、場内試験により暫定値を定めた。（2021～2023） ・暫定値を用いて現地実証を行い、生育が良好な場合には収量及び子実タンパクに対する十分な効果が確認され施肥法として適合したが、生育が劣る場面では効果が不十分だった。（2024～2025）	継続	生育状況に応じた施肥法について、生育状況を簡易に評価できるNDVIを利用した手法を開発する。 また、莖立期での良好な生育を安定確保するため、初期生育の改善手法について検討する。

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・環境に配慮した米のブランド化を図るためのPR、販売方策の策定（1方策）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・環境に配慮した米の生産に係る情報を消費者に分かりやすく発信するツールを開発した。（2021～2025） ・生物多様性については、水田に生息する水生昆虫・カエル類・魚類の種数を栽培方法等から予測する多様性評価モデルを完成した。（2021～2025） ・情報発信ツールを用いた実証販売を行い、その使用性と販売促進への影響を調査し、環境に配慮した農産物のブランド化を図るためのPR・販売方策を策定した。（2025） 	終了	—
・イチゴ新系統「愛経4号」の栽培指針の策定（1指針）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・栽培指針を策定し、2024年3月28日に場HPに公表した（1指針）。 ・心止まり発生を抑制する育苗期の施肥時期を明確化。（2021～2022） ・厳寒期に草勢を維持するための炭酸ガス施用及び給液管理を最適化。（2021～2022） ・養分吸収特性を把握し、指針を策定。（2023） 	終了	—
・花きの長距離輸送時における品質劣化要因の解明と対策技術の確立（3技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・コショウランの花の萎凋はエチレンが原因で、エチレン阻害剤の1-MCPの利用により、長期の暗黒下で発生する萎凋に抑制効果があった（1技術確立）。また、1-MCPの効果は、蕾では花より短いことが明らかとなった。（2021～2024） ・ポインセチアの黄化葉発生の要因はエチレンで11～12月に出荷する作型では、出荷7日前のBA60ppmにより黄化発生が抑制された（1技術確立）。（2021～2023） ・シクラメンの黄化葉は輸送中から店頭までの温度変化が発生要因の一つと考えられた。発生抑制にはSTS散布が効果的であった（1技術開発）。（2021～2024） 	終了	—
・ナシ「瑞月（愛知梨3号）」の高品質安定生産技術の開発（3技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ナシ「瑞月（愛知梨3号）」の高品質安定生産技術を3技術（NAA処理による落果防止技術、摘果時期等の検討による果形改善技術、短果枝利用技術）開発した。（2021～2025） 	終了	—
・屋根かけ樹上完熟栽培「不知火」における省力多収技術の確立（1技術）	C	<ul style="list-style-type: none"> ・多頻度かん水技術と肥効調節型肥料を組み合わせた栽培方法について検証した（2021～2023）後、慣行かん水で施肥方法を変更した（2024）が、果実品質及び増収への効果は不明瞭であった。 	中止	・現行の肥効調節型肥料による省力多収技術の確立では、これ以上の効果が見込まれないことから試験を中止する。
・消費者ニーズに対応したカンキツ新品種の高品質安定生産技術の確立（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・「みはや」のM、L果生産に向けた着果管理技術を確立した。（2021～2022） ・「みはや」の無核化技術を確立した。（2023～2024） 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・消費者ニーズに対応したみかわ牛の高品質生産技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・肥育牛の育成期に粗蛋白質（CP）給与量を増量しても発育や枝肉成績に影響はなく、飼養標準に基づくCP給与量で効率的に飼養できることが分かった。（2020～2021） ・肥育期間中にオレイン酸含量の多い飼料を給与することは、給与期間にかかわらず肉質に影響がないことが分かった。（2021～2024） 	終了	—
・系統豚を利用した高品質肉豚生産技術の開発（1技術）	B	<ul style="list-style-type: none"> ・系統造成中デュロック種を雄に用いた系統三元豚の産肉性はアイリスナガラを用いた場合と同等であることが明らかとなった。（2022～2023） ・系統造成中デュロック種を雄に用いた系統三元豚へのアミノ酸比率法は筋肉内脂肪を増加させる可能性が示唆された。（2024～2025） 	終了	—
・名古屋コーチンの卵や肉の風味及び食味向上技術の開発（2技術）	B	<ul style="list-style-type: none"> ・冷蔵庫解凍が最も肉質および食味性への影響が抑えられた。（2021～2023） ・名古屋コーチン卵の特徴である卵臭のにおい成分として、トリメチルアミンが関与している可能性が示唆された。（2021～2025） 	継続	・トリメチルアミンの卵黄中含量を明らかにすると共に品種間での分解酵素の発現量を明らかにするため。
・特徴のある香味を持つてん茶品種の生産技術の開発（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・特徴ある香味を持つてん茶品種の生産技術を2技術開発した。 ・有機質肥料の施肥法改善技術として、大豆粕を春期の芽出肥に利用することで化成肥料と同等程度の施肥効果があることを明らかにした。（2021～2025） ・新たな被覆方法として、棚三重被覆がてん茶品質を高める遮光強度と遮光日数を明らかにした。（2023～2025） 	終了	—
・「愛経4号」における裂皮果の発生要因の解明（1要因）	C	<ul style="list-style-type: none"> ・普通促成及び超促成栽培において裂皮果の発生程度を調査するとともに、果実品質を総合的に評価した。その結果、市場性には影響しないと判断された。 ※中止 	中止	・試験研究成績及び農業改良普及課始め関係者からの意見聴取により、裂皮果が問題になることはない判断されたため。
(ウ) 中山間地域等の活性化や、多様な経営体に対応する生産技術の開発				
・「ミネアサヒSBL」の食味評価「特A」取得に向けた生産技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・味度値、玄米タンパク質含有率から見た良食味のための稲体の最適窒素吸収量を定め、それを実現する施肥技術を開発した。（2021～2022） 	終了	—
・キャベツ、タマネギ複合経営における低コスト機械化体系の確立（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・一条植え栽培に適した施肥方法、除草体系を明確化し、一条植全自動移植機を活用したタマネギ栽培マニュアルを作成した。（2021～2022） 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・夏秋トマト・ミニトマトのヤシがら培地耕における日射比例制御技術の開発（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・夏秋トマト・ミニトマトにおいて、ヤシがら培地耕における日射比例制御技術を開発した（各品目1技術、合計2技術）。 ・夏秋大玉トマトのヤシがら培地栽培において、日射比例給液時の適切な給液濃度を明らかにした。（2022～2024） ・夏秋ミニトマトのヤシがら培地栽培において、日射比例給液時の適切な給液濃度を明らかにした。（2024～2025） 	終了	—
・ジネンジョの新たな需要に応じた省力・安定生産技術の開発（3技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ジネンジョの新たな需要に応じた省力・安定生産技術を開発した（合計3技術）。 ・栽植密度や肥料の種類などを明らかにして、需要に応じたイモの生産技術を開発した。（2021） ・販売芋生産における養分吸収特性に応じたジネンジョ専用全量基肥肥料を開発した。（2021～2022） ・種芋生産における養分吸収特性及びジネンジョ専用全量基肥肥料の適応性を明らかにし、専用全量基肥肥料の利用技術を開発した。（2021～2025） 	終了	—
・中山間地における露地栽培小ギクの電照処理等による安定生産技術等の開発（2技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・現行慣行品種の電照処理等による作期拡大を検証し、「めざめ」、「ひでよ」は6月15日消灯作型で、「紅奴」は6月18日消灯作型で旧盆出荷可能となることが明らかとなり、露地小ギクの電照栽培技術が確立された。（2021～2025、1技術確立） ・2～3月に直挿しを行う場合、農PQ及び寒冷紗被覆が有効であった。3月下旬、6月上旬に直挿しを行う場合、直挿し21日後に活着することを明らかにし、3月下旬は保温方法の改良、6月上旬は遮光方法を改良し、露地小ギクの直差し栽培技術が確立された。（2021～2023、1技術確立） 	終了	—
・水分センサーにより得られたデータに基づく鉢物給液システムの開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・底面給水の鉢物シクラメンにおいて実証を行い、水分センサーを利用した体積含水率23%を指標とする鉢物給液システムが開発された。（2024～2025、1技術確立）。 	終了	—
・新規発熱体を利用した育苗技術の開発（1技術）	A	<ul style="list-style-type: none"> ・形状を改良した新規発熱体を利用した加温機（試作機）により、温室内での5℃加温が適切に行うことができ、新規発熱体を利用したシクラメンの育苗技術が開発された。（2024～2025、1技術確立） 	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
エ 愛知のブランド力を高める多彩な品種の創出による需要の拡大				
(ア) 気候変動等に強く多様なニーズに対応した水稻・小麦品種の開発				
・水稻品種「なつきらり」の胴割れを改善した品種の開発（1品種）	C	・育成した3系統について、胴割れはある程度抑制できたが、白未熟粒の発生が「なつきらり」より多く、優良系統を選抜できなかった。 ・「なつきらり」を遺伝子背景とした系統の育成は中止した。（2021～2024）	見直し	・遺伝子背景を「なつきらり」に限定することなく、「コシヒカリ」熟期の高温・胴割れ耐性を持つ品種の開発を進めていく。
・水稻における斑点米カメムシ抵抗性系統の開発（1系統）	A	・「あいちのこころ」にカメムシ抵抗性遺伝領域と、病害虫抵抗性遺伝子（pi21、OVC）、高温耐性遺伝子（Apq1）を集積した系統を選抜した。（2021～2025）	終了	—
・水稻品種「なつきらり」の胴割れ性を判別する高精度DNAマーカーの開発（1マーカー）	A	・第2染色体に座乗する胴割れの原因となる遺伝子の領域近接するDNAマーカーを開発し、高温耐性形質との連鎖を確認した。（2021-2024）	終了	—
・業務用需要に対応した水稻多収系統の開発（1系統）	B	・坪刈り収量660kg/10aを達成し、外観品質に優れ、縞葉枯病抵抗性を有する多収系統を開発した。年次変動性を確認するため、地方系統番号の付名は1年遅れる見込み。（2021～2025）	終了	—
・中山間地域に適したいもち病など病害抵抗性を有する極良食味米系統の開発（1系統）	A	・いもち病及び縞葉枯病抵抗性を有し、食味の優れる「愛知140号」を開発した。（2021～2024）	終了	—
・中山間地域での栽培に適した短鎖アミロペクチン粳米系統の開発（1系統）	D	・2024年度までに3系統を選抜した。選抜した3系統は白未熟粒の発生が多く、品種化が困難なため中断した。（2021～2024）	中止	・選抜した系統を交配母本に用いて育成系統全体の食味向上を図っていくため、個別の課題は設定しない。
・高製粉性、病害抵抗性を有する「きぬあかり」の同質遺伝子系統の開発（1系統）	A	・「きぬあかり」に製粉性を高める遺伝領域を導入し、製粉性が改善された有望系統を3系統開発した。（2021～2025）	終了	—
・複合病害抵抗性を有する硬質小麦系統の開発（1系統）	A	・赤さび病、うどんこ病、黄斑病に抵抗性を有し、コムギ縞萎縮病抵抗性QTLを持つ「東海110号」を開発した。（2021～2025）	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・コムギ縮萎縮病抵抗性品種開発のためのウイルス検出方法の確立（1技術）	A	・簡易で精度も高いRT-LAMP法を開発し、簡易抽出サンプルの反応を安定させる方法をまとめ、検出マニュアルを作成した。（2021～2023）	終了	—
(イ) 多様な消費者ニーズや地域特性に対応した園芸品種の開発と選定				
・あいち型植物工場に適したイチゴ促成栽培用系統の開発（1系統）	B	・二次選抜により4系統に絞り込み、炭疽病抵抗性検定を実施することとなった。 ・一～三次選抜による系統の絞り込みを実施。（2021～2024） ・愛知県イチゴ育種サポーター会議での協議を経て、有望な2系統を現地適応性試験に供試することになった。（2025）	継続	・気候変動や市場環境の変化に対応した新品種に対するニーズがあるため。 【<次期基本計画における取り組み>】 ・地球温暖化に対応可能なトマト、ナス、イチゴ品種の開発《重点①》】
・直売、観光農園に適したイチゴ促成栽培用系統の開発（1系統）	B	・三次選抜で有望な1系統への絞り込みを実施し、現地適応性試験及び特性調査に着手した。 ・一～三次選抜による系統の絞り込みを実施。（2021～2024） ・有望な1系統の現地適応性試験及び特性調査。（2025）	継続	・気候変動や市場環境の変化に対応した新品種に対するニーズがあるため。 【<次期基本計画における取り組み>】 ・地球温暖化に対応可能なトマト、ナス、イチゴ品種の開発《重点①》】
・高温耐性を有する複合病害抵抗性トマト系統の開発（1系統）	A	・育種目標に合致するトマト系統を開発した（1系統）。 ・主要な作型でF1試交系統の評価を実施し、有望1系統を選抜。（2021～2023） ・有望系統の現地適応性試験を実施。その結果、高温期の着果安定性が評価され、品種化を目指すこととなった。（2024～2025）	終了	—
・複合病害抵抗性を有する単為結果性トマト品種の開発（1品種）	D	・有望1系統に絞り込んで現地適応性試験を実施した結果、品質上の問題（裂果）の解決が難しいと判断された。 ※中止	見直し	・本試交系統については、作型の選定や栽培管理等での品質上の問題解決は困難であると判断されたため。
・漬物加工特性、単為結果性及びとげなし性を持つナス品種の開発（1品種）	A	・育種目標に合致するナス品種「試交17-22」を開発した（1品種）。 ・前期計画期間からの継続で、現地適応性試験を実施。（2021） ・育成完了、登録出願。（2021）	終了	—
・土壌病害抵抗性を有するナス育種素材の選定	A	・青枯病抵抗性を有する農研機構の固定系統と県が保有する固定系統の一代雑種を作出し、一定の青枯病抵抗性を有することが確認され、有望な育種素材として選定された。（2024） ・一代雑種の形質評価を実施したところ、収量、品質の面で品種化はできないと判断。一代雑種の自殖後代を展開し、優良系統の選抜に着手。（2025）	継続	・気候変動や市場環境の変化に対応した新品種に対するニーズがあるため。 【<次期基本計画における取り組み>】 ・地球温暖化に対応可能なトマト、ナス、イチゴ品種の開発《重点①》】
・エゴマの早生品種の開発（1品種）	A	・育種目標に合致するエゴマ品種「No.7」を開発した（1品種）。 ・現地適応性試験を実施。（2021～2023） ・育成完了、登録出願。（2023）	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・手まり、八重咲アジサイの中間母本の選定（10系統）	A	・20交配中間母本の最終選抜において10系統を選定した。（2021～2025）	終了	—
・病害抵抗性等を有するカーネーションの中間母本、品種の開発（1品種、1系統）	A	・1品種（フジ愛農1号）を品種登録出願中で、中間母本1系統（フザリウム抵抗性を有するスタンダードタイプ）を選抜できた。（2021～2025）	終了	—
・耐暑性・低温開花性を有するスプレーギク品種の開発（1品種）	A	・18交配の夏秋系1品種と秋系1品種の合計2品種を開発した。（2021～2022）	終了	—
・キク矮化病等抵抗性を有するスプレーギク品種の開発（1品種）	B	・21交配の四次選抜を実施したが、猛暑による葉焼けが発生したこと及び現地適応性試験の結果が良くないことから品種化には至らなかった。（2021～2025）	中止	・品種化にいたらなかった。
・多様な需要に応えるキク品種の開発（1品種）	A	・21交配系統の四次選抜及び現地適応性試験を実施し、有望な冬季栽培向きボンボン咲き1品種を開発した。（2021～2025）	継続	・引き続き品種作出に取り組む。
・耐暑性・低温開花性を有する無側枝性輪ギク品種の開発（1品種、1系統）	B	・22交配の夏季栽培向き2系統の三次選抜及び現地適応性試験を実施し、有望な夏秋系を2系統選抜した。（2021～2025）	継続	・引き続き品種作出に取り組む。
・イチジクのオリジナル品種の開発（1品種、1系統）	A	・優良系統13MCT-11について、現地試験の結果、食味良好であることから、各試験者から品種登録出願の要望が示された。（2021-2024） ・交配の結果得られた個体から、果実品質に優れる3系統を選抜した。引き続き、特性の解明を行う。（2021-2025）	終了	—
・イチジクの果実着色に連鎖する高精度DNAマーカーの開発（1マーカー）	A	・イチジクの果皮色に連鎖したDNAマーカーを開発し（1マーカー）、育成集団を用いて有効性を検証した。（2021-2025）	終了	—
・ウンシュウミカンのオリジナル品種の開発（1品種、1系統）	B	・ウンシュウミカンの新品種育成は、「C系統」の特性調査および現地適応性試験を実施し、蒲郡市農業協同組合と共同で品種登録出願を行った。（2021～2024） ・ウンシュウミカン兄弟系統の作出および優良系統の選抜は、農研機構から配布された42個体のうち1個体は枯死したが、10個体が着果し果実品質調査を実施した。ウンシュウミカンより品質が優れる個体はなかった。（2021～2025）	継続	・ウンシュウミカン兄弟系統の作出および優良系統の選抜では、着果せず、調査していない個体がある。また、今回調査できた個体も1～2果のものがあるため、本来の品質を調査できたとは考えにくい。調査を継続し、選抜対象個体の本来の果実品質を判断する。

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・高品質な中晩生カンキツのオリジナル品種の開発（1品種）	B	・優良系統「10-4-8」とその対照品種「せとか」「麗紅」を場内ほ場に定植し育成を進めた。（2021～2025） ・品種登録出願に向けた特性検定調査を行った。（2025）	継続	・優良系統「10-4-8」の品種登録出願に向けた特性検定調査を引き続き行う必要があるため。 ・次の優良系統を見つけるべく、引き続き交配及び選抜を行う。
・県内産地に適応した果樹品種の選定（3品種）	A	・ブドウ新系統を2系統選抜し、県内6か所での現地適応性試験を実施し、品種登録出願を行った（2品種）。（2023～2025） ・着花の少ないナシ「蒼月」において、新梢誘引を行うことにより、花芽率が高くなることを確認した。（2022～2024）適応した系統として選定（1品種） ・上記以外にモモ晩生品種比較及び香酸カンキツについて調査を実施したが、選定には至っていない。（2021～2025）	継続	香酸カンキツでは、樹冠拡大が早く収量が多く採れる「ピラフランカ」「リスボン」、かいよう病に強い「璃の香」「マイヤー」が候補となったが選定には至っていない。
・マーケティング手法を活用した新品種ブランド化方策の策定（3品目）	A	・ブランド化の事例調査及びマーケティング手法による生産者、実需者、消費者の評価解析を行い、①イチジク②イチゴ③アジサイの新品種のブランド化方策を策定した。 ・①イチジクは、品種特性を消費者や実需者に効果的に伝えるために、情報発信手法について整理して取りまとめた。（2021） ・②イチゴは、育種段階から関係者がブランドの方向性を検討することを前提に、ブランドを構成する価値を整理して取りまとめた。（2021～2023） ・③アジサイは、ブランド展開に必要なマーケティング活動を取りまとめた。（2022～2024）	終了	—
・ゲノム編集による優良花き品種改良法の開発（1技術）	A	・カーネーション及びキクについて、花色に関連した遺伝子を変異させるゲノム編集技術を開発した。（2022-2025）	終了	—
(ウ) 愛知のブランド力を高める家畜の系統の開発と優良系統の保存				
・産肉性の優れたデュロック種系統豚の開発（1系統）	A	・産肉性に優れたデュロック種系統豚「アイリスD2」を造成した。（2016～2025）	終了	—
・豚の凍結受精卵や凍結精液を活用した優良遺伝子の復元技術の開発（1技術）	A	・遠隔地への運搬方法の運用の技術指針を得ることが出来た。（2022～2025）	終了	—
・外部卵質に優れ雌雄鑑別を可能にする名古屋コーチン新系統の開発（1系統）	A	・羽性雌雄鑑別を可能とするNGY6系統を造成した。（2001～2023）	終了	—

研究事項及び達成目標	最終評価		基本計画2030での取扱い	
		主な成果		取組の概要
・名古屋コーチン始原生殖細胞の凍結保存技術の開発（1技術）	A	・名古屋コーチン始原生殖細胞の培養・凍結保存技術を確立し、NGY1系統及びNGY3系統について家系ごとに凍結保存した。（2021～2025）	終了	—
・有望系統保存のためのウズラにおける人工授精技術の開発（1技術）	C	・下記技術開発は実施したが、目標とした受精率に至らなかった。 ・ウズラに適した精液採取技術を開発。（2020） ・ウズラに適した精液注入法を開発。（2021～2022）	継続	・受精率低下の要因を明らかにして、受精率の高い人工授精技術を確立するため
・家畜ブタに対する新規卵採取技術の開発（1技術）	B	・未経産豚であれば卵子採取が可能であることがわかった。（2023～2025）	見直し	・今回の手法では、採取可能な小型の豚においても、受精卵移植に必要な卵子数が得られないことがわかった。 ・課題となる個別の技術開発や別のアプローチを検討する。